

コロナ禍と日本人

観一高同窓会京阪神支部 会長 観一・10回 片桐 陽

(昭和34年卒)



コロナ禍に見舞われる中、皆様におかれましてはお変わりなくご壮健でお過ごしでしょうか、お伺い申し上げます。

コロナウイルスの蔓延という一年前には想像すらしなかった事態に遭遇し日本は世界各国はその脅威に慄いています。今回の災禍は世界を変え人類の歴史をも変えることになるのではないかと危惧しています。人類の英知は科学技術を進歩発展させ、遂に生命の誕生から宇宙の開発をも可能とするという幻想すら抱かせてきました。神の領域への挑戦のようにすら思われますが、目にも見えない微細ウイルスの前にこれほど人間は無力であったことを知らされ、改めてその傲慢さ弱さ愚かさを知らされる感を禁じえません。

コロナ禍の世界的蔓延の結果、オリンピック・パラリンピックの開催が一年間延期され、選抜高校野球・全国高校野球大会が中止されました。プロ野球も開幕が延期されるほか、スポーツの各分野で開催の延期・中止が決定され、学校教育の面でも授業日数の減少対策から遂には9月新学期説までもが議論されるようになりました。

ウイルスの蔓延拡大を防ぐため全国的に緊急事態宣言が発せられました。人と人との接触を大幅に制限したことの

経済的社会的影響は甚大で各方面で深刻な事態が生じてきました。経済活動の低下は企業倒産を続出させ、その結果働き場を失った失業者が多発しています。またアルバイト収入の途絶えた学生は就学費負担に耐えられず中退する者が数多く発生するだろうといわれています。この深刻な事態に対応するため政府は国の将来を懸けて、企業支援、雇用対策等前代未聞の財政支援を決定したところです。

今回のコロナウイルスの世界的流行から何を学ぶべきか、何が示されているのかと考えています。それは多分現代社会の在り方、人間の在り方生き方の根本が問われているのではないかと思うのです。人間の歴史は戦争の歴史であるといわれますが、世界規模の大戦は半世紀以上発生しておらず、我々は歴史的にも稀にみる平和な時代を送っているというべきでしょう。特に我が国はあの大戦から70有余年、平和で豊かな環境に恵まれてきました。今回の深刻な事態に遭遇し、平和の時代を生きる我々はあの時代を命を懸けて生きてこられた先輩たちに思いを致すべきだと諭されているように思われてなりません。あの戦争には不本意にも参戦を強いられ犠牲となった人も多かったです。う。しかし、心ならずも与えられたその場では人のために役立ちたい、人に喜ばれたいとの思いで多くの人は懸命に生きたのではないかと思うのです。今回の災禍は余りにも自由で豊かな時代を野放図に生きる我々に対して、理不尽と思われる状況下で如何に生きるかという厳しい問い掛けがされているのではないかと思えてなりません。

コロナ禍の渦中であって、人の命と健康を守るため自身の生活を犠牲にしても日夜懸命に尽力しておられる医師はじめ医療従事者の奮闘ぶりが報道されるたびに、その人たちに敬意を表するとともに感謝を覚えざるを得ません。その人達の活躍ぶりを拝見するにつけ、人に役立ち、人のために生きることと美学とする我が国のDNAは健在なりと何か誇らしく感じているところです。コロナ患者の死亡率が海外諸国に比し我が国は圧倒的に低いことが伝えられま

すが、このような人の真摯な努力のお陰ではないかと感謝を禁じえません。

我が国には古くから人に対する思いやりをもつ心情が大切にされる風土が培われてきました。しかし、戦争のない平和な時代となり人々は心よりも豊かさを求めるようになりました。資本主義経済は市場主義経済へと変貌し、人々の意識と行動も微妙に変化が生じてきました。「カネさえあれば何でもできる」と豪語する若手経営者が理想の経営者と称賛され、若者からはアイドルのように仰がれる存在となる時代が到来しました。「武士は食わねど高楊枝」という古来の美学はもとより「カネは大切だがその作り方こそが大切である」とする日本の経営理念は久しく声を潜めてきました。しかし、今回のコロナ禍は「日本人の魂健在なり」ということを奇しくも海外に喧伝する好機となったのではないかと思うのです。

敗戦後、わが国が国際舞台に復帰できたのは吉田茂総理の存在が大きかったといわれていますが、吉田総理が吉田総理たり得たのは影の参謀白洲次郎氏あつてのことだと伝えられています。白洲氏はカネにも名誉にも恬淡としており、自身のことを顧みず常に正義を貫き通しました。野蠻国のレッテルが貼られた弱小国が戦勝国と対峙する至難の業を見事果たした彼が事に処するにあつての判断基準にしたことは「プリンシプル（道義、原理）」であつたといわれています。相手が誰であろうと何が正義か、人間はいかにあるべきかを基準に判断していたとのことでした。

アフガニスタン難民救済のため医療チームを結成しハンセン病治療を中心とした貧困層の診療に当たつてきた中村哲氏の著書「天、共に在り」に接しました。九州で精神神経科医師として医療活動をしていた時、ある患者から「生きるこの意味が分からないのです。先生はなぜ生きているのですか」と質問され、医師としてのそれまでの生活に疑問を感じ「一人で成り立つ自分はない。自分を見つめるだけの人間は滅ぶ。他者との関係において自分が成り立つ

ている」との思いに至り、昆虫採集に野山を駆け巡った少年時代のこと、登山好きの友と登山を楽しんだこと等を思い起こし、彼はヒマラヤに近いアフガニスタンに渡り劣悪な医療環境での地域医療に取り組むことにしたと語っています。医療活動以前に住民の健康管理が必要、そのためには健康な水の確保が必要、そのためには水源確保が必要と考え、砂漠の中に全長25キロの灌漑水路完成までの苦労話も語られています。アフガニスタンに移り25年、砂漠地が緑地になり豊かな国となる途上、彼は凶弾に倒れ還らぬ人となりました。アフガニスタンの人は勿論、彼の成した偉大な事業を通し日本人の素晴らしさを讃える人が世界で増えているといわれています。

日本には「着飾るから美しいのではなく、人のために生きることが美しい」とする美学があります。私たちが生まれ育った観音寺にはそれがありません。そのような環境に育つたことに誇りと感謝を覚え、その文化をいつまでも大切に育んでいきたいものです。そして、次の世代を担う学生たちにも、自信をもってその文化を継承してほしいと願うばかりです。